

第20回 厚木看護専門学校 教育課程編成委員会 議事録

日時：2025年9月18日(木)

16:00～17:00

場所：厚木看護専門学校 会議室

1 外部委員出席者（7人、欠席なし）

- (1) 高野 秀雄（厚木医師会長）
- (2) 北野 義和（厚木病院協会 副会長）
- (3) 大西 早苗（神奈川県看護協会県央支部副支部長）
- (4) 下島 三千代（東名厚木病院看護部長）
- (5) 神保 京美（伊勢原協同病院 副院長兼看護部長）
- (6) 井上 和仁（厚木市健康こどもみらい部健康医療課長）
- (7) 宗方 泰司（神奈川県立厚木王子高等学校長）

2 厚木看護専門学校教職員出席者（5人）

学校長 五十嵐一美【委員長】、副学校長 田原裕子【副委員長】、
看護学科長 島田真由美、看護学科技幹 中原真弓、総務課長 茂木憲明
看護学科総括主査 高橋隆子【オブザーバー】、
看護学科総括主査 池田紀子【オブザーバー】

3 議題等

- (1) 議題
 - ① 2024年度 学年目標とその到達度評価
 - ② 卒業生の看護実践能力評価結果
 - ③ 第5次改正カリキュラムの実施状況
- (2) (1)①、②、③の議題に関する質疑応答、意見交換
- (3) イノベーションルーム紹介
- (4) 配付資料
 - ① 2025年度入学生用 スクールガイダンス
 - ② 2024年度 学年目標とその到達度評価について
 - ③ 卒業生の看護実践能力評価結果
 - ④ 第5次改正カリキュラムの実施状況について
 - ⑤ 教育課程編成委員会名簿
 - ⑥ 教育課程編成委員会規程
 - ⑦ 座席表

4 内容等

【田原副学校長】

配付資料の確認を行った。委員は全員出席し当委員会規程第5条第7項に基づき定足数を満たしている。

【五十嵐学校長挨拶】

本日は三つの議題を委員の皆様にお示しし、ご意見を頂きたい。

これから当校の総合型選抜入試がスタートする。どこの看護専門学校でも学生募集は喫緊の課題となっている。このような中で魅力的なカリキュラムや教育の成果を、どのように発信していけるかが、今後の生き残りにかかってくると実感している。当校でも、様々な付加価値を考えているところである。

本日はその一つである、前回の教育課程編成委員会でも説明した「イノベーションルーム」が完成した。お披露目させていただきたいと考えている。

また、お配りした資料に含まれている海外研修についてである。コロナ禍前に1回目を実施したかったのだが、コロナウイルスのパンデミックで見送らざるを得なかった。しかし、ここにきて実現する。値段が約2倍程度になるが、2026年3月に向けて準備を着々と進めている。

そして、これまでも何回か報告させていただいているダブルスクールについてである。一期生である現3年生が、当校在学中にとるべき放送大学の単位を全て修得した。順調に進んでいると思う。

このような状況のなか、「地域強化型カリキュラム」というものが、私たちが実践しているカリキュラムである。病院の臨床看護、そして地域に目を向ける。そして多職種連携と様々な課題を含めながら、一定の学習成果を狙っているところである。

本日は忌憚のないご意見をいただきながら、当校の教育の発展に価値を見出していいただければと思う。どうぞよろしくお願いする。

【田原副委員長】

外部委員紹介及び、当校教職員紹介を行った。

本日の議事進行については、委員会規程第5条に基づき、五十嵐学校長を委員長とし、委員長が会務を総理することとなっている。よろしくお願いする。

【五十嵐委員長】

次第に基づき進行する。議題は3点ある。まず議題①②③までの資料をまとめて説明し、質疑・検討にすすめる。

【中原技幹】

資料1に基づき、「議題① 2024年度学年目標とその到達度評価について」を説明した。

【島田学科長】

資料2に基づき「議題② 卒業生の看護実践能力評価結果」を説明した。

【島田学科長】

資料3に基づき「議題③ 第5次改正カリキュラムの実施状況について」を説明した。

5 議題①「2024年度 学年目標とその到達度評価」についての質疑応答

【宗方委員】

学校長あいさつのなかで、学生募集が喫緊の課題になっているとお聞きした。これは県立高校でも同じであり、どうしても私学に流れていく状況である。

昨年度9月の同会議で色々ご意見を述べさせていただいたのに、貴校へのエントリー

報告者は0であった。これではいけないと思い、今年は指定校推薦で2名、総合型選抜で5名ほどエントリーさせていただいていると思う。よろしくお願いします。

資料1の1年生の学年目標⑤「学習習慣を身に着けることができた」をみると、「そう思う」のパーセンテージが低いことが気になる。学び続けることは看護師という職業的に重要なことで、大切にしていいただきたいところである。

【中原委員】

入学した学生に教員からは、1日3時間は学習しないと看護の専門職としての学習が続かないと話している。入学試験の面接で1日どのくらい勉強しているのか聞くと、毎日勉強していると答える。しかし入学後に改めて聞くと、テスト前だけ勉強するとか、1日30分程度勉強すると答える。1日1時間以上の勉強をしている1年生は少ない。

高校までの学習スタイルから、当校に入学してからの必要となる学習スタイルは異なる。その必要性は理解しているものの、毎日、数時間の学習を継続できているかという、難しい現状となっている。

【宗方委員】

私は、高校での朝会などで次の話をしている。

「君たちはいわゆる偏差値的に高い大学に入ることをゴールにしているのではないか。

本来は、社会人として活躍する概ねの方が大学に入っていて、社会人として活躍することが目的なのではないか。もちろん受験技術とかも大事なけれども、社会人として求められるスキルを見つけることを念頭に高校生活を送るべきではないか。」という話をしている。

厚木看専でもこれに近いことが言えるのかもしれないと感じている。学生たちの目的は、看護師として社会で活躍することだと思う。そのために身につけなければならないスキルは何なのか。しっかりと実践させるよう教育課程を組んでいくことが重要でないかを感じる。

また、自分自身を理解していない学生も多いのではないかと思う。資料1の④「他者を理解し協調性を高める努力ができる」という設問があるが、この設問の表現は「自己を理解し、他者を受容し、協調性を高める」という設問の仕方が適切だと思う。

【五十嵐委員長】

今、当校が目指しているのは、「課題を義務として学習する」というところから脱却することである。「自ら学ぶ」ことに力を入れて取り組んでおり、今まさに過渡期である。

そのために、金曜日の自由登校「Self Learning Day」に係る教員・チューターが、学生が自ら学ぶことを目標とし、様々な苦勞をしながら、自ら学ばせるように努力している。

【宗方委員】

資料1の最下段「⑤課題を発見し探求し続ける能力を身につけることができた」で気になるところがある。課題を発見する能力は看護師として重要な部分だと思う。

その上にある「④協働して問題解決を図るための能力を身につけることができた」では51%が「そう思う」と回答している。しかし「⑤課題を発見し探求し続ける能力を身につけることができた」では「そう思う」が極端に下がっていると感じる。ここは着目すべきと思う。

(看護師は)患者の様子を見て、援助するタイミングを判断し対応しなければならない。そのためにもまず課題を見つける力が重要であり、この部分の強化はこだわったほうが良い。

6 議題②「卒業生の看護実践能力評価結果」についての質疑応答

【神保委員】

85名にアンケートをとっているが、23名の回答となっている。

教育担当者と卒業生との間に乖離があるという自覚を持ち、当院でも看護師教育に取り組んでいきたい。回答率が低いと感じるが、年度で違いはあるのか。

【島田学科長】

回答率はWebアンケートで依頼しているためか、30%に達すれば良いほうだと思う。例年、20数%で推移している。

【神保委員】

Webアンケートは紙面よりも回答率が下がり、乖離が大きくなるように感じている。

【五十嵐委員長】

看護師として経験豊かな「教育担当者」からの景色と、「新卒看護師」から見える景色は違うと思う。このようなアンケート調査をしている看護学校は、珍しいと思っている。新カリキュラムで初めての卒業生の状況となる。

【下島委員】

教育担当者と卒業生との乖離の部分についてである。

卒業生本人が、自分は「できる」と思うことはよいことだ。資料の「卒業生」に該当する新人看護師の採血テストをしたところ概ねOKだった。病棟において当たり前のことを普通にできていた。

しかし、実際の患者さんに採血するとなると、患者さんに「説明」を加えることになる。再度、先輩看護師と一緒に患者さんへの採血テストを実施したが、結果を踏まえると「できる」の基準が違うと感じた。ここは卒後の教育で担わなければならないところかもしれないが、患者への採血は患者個別の容態により異なることをどう理解していくか課題と思う。

【島田学科長】

到達レベルが全く異なり、期待値も全く異なる。ここを擦り合わせないと、ただ「できた」で終わってしまう。先ほど自己理解が出来ていない学生が多いとのことだが、宗方委員からでた。自分のことを理解する。これを繰り返し行っていく。

【五十嵐委員長】

実習の自己評価では、学生は「A」と高い自己評価をつけてくる。そして教員評価が「B」「C」になると自らに受容できない。「何故私がBなのか」となる。この擦り合わせが必要である。

【宗方委員】

乖離のある部分を新しい教育課程にフィードバックすることが大事かと思う。

【島田学科長】

このアンケート調査は、コロナ禍前から行っており、新カリキュラムの影響が反映されていると思う。

【宗方委員】

乖離で不足する部分について、例えばDXを取り入れながら補うなど、何か取り組みはあるのか。

【島田学科長】

シミュレーションルームで模擬患者の設定ができる。急変時の経験はなかなか体験できない。実際の看護現場に向けた補いの一つである。

【宗方委員】

実際に患者の体に触るわけにはいかない。D XやV Rを活用しながら実地の場面を経験するのも一つの方法だと思う。

【高野委員】

私のクリニックにも若い看護師はいる。その姿を見ると、SNS の時代で仲間とのコミュニケーションがすごく重要であり、そして深い。我々の頃よりもかなりディープなコミュニケーションが形成されていると思う。その一方では社会、他者と競合しなければならない現実がある。

教育担当者の「できる」評価が1桁代のところである「死にゆく患者及び家族の心理的ケアを行う」や「チーム内の役割と責任を自覚し他のメンバーと協働する」などを見ると、他者とのコミュニケーションが育っていないと感じる。

これには、次のような社会的な背景が原因であると思う。先輩後輩との付き合い方においても、言葉でコミュニケーションするのではなく、スマートフォンの画面越しに文字でコミュニケーションする。患者とのコミュニケーションで求められていることと、これまでのコミュニケーションの取り方に、すごく差がある。このため教育担当者の評価は低くなってしまう。これは卒業生や教育担当者が悪いということではなく、現実の社会状況となっている。

これからの「他者とのコミュニケーション」については、学校内での友達とか教員とだけでなく、チームとか地域医療を担う医療者レベルでの、世代を超えたコミュニケーションの機会が必要と思う。また一方で、他者と競合することで得られる「誇り」を体験できる機会も必要だと思う。これらの機会が上手く機能すれば、評価は一致してくるのではないかと思う。

【宗方委員】

ソーシャルディスタンスに象徴されるように、他者とのつながりを絶たれながらもオンラインが普及し、学校のスタイルもだいぶ変わってきている。こうしたなか学生はコミュニケーションが難しい状況にある。

情報収集は得意であり、その能力は非常に高い。頭では分かっているが、その表現ができない。高等学校の課題でもあると感じている。

【五十嵐委員長】

貴重なご意見感謝申し上げます。当校で共有させていただく。

7 議題③「第5次改正カリキュラムの実施状況について」の質疑応答

【五十嵐委員長】

先ほどから話題となっているコミュニケーションの問題についてである。

当校のカリキュラムには「協働学習」が非常に多い。協働学習の無い科目はないといっても過言でない。これを踏まえると、学生たちは、入学したときから考えて自分たちのコミュニケーション力が上がったと判断するだろうと想像できる。

【島田学科長】

対象者がバラバラになっているところがあるが、3年生調査結果は、今年3月に卒業した学生、2年生調査結果は現在の3年生、1年生調査結果は現在の2年生のものである。各学年の調査結果は全て、旧カリキュラムから新カリキュラムに移行した結果となる。

解剖学は1年生のときから調査項目に入っていて、3学年共通している項目であるが、3年目が最も理解が進んでいると思う。

【神保委員】

卒後1年目の看護師は、学校ですごく勉強してきた。そのうえ臨床現場に出てからも半年間は色々な研修がある。負担も大きいことから、課題のレベルを下げる場面もあるし、時期をずらして負担が重ならないようにしたこともある。

静脈注射の課題は、基準を下げて回数を少なくしてみた。それでも1年目看護師からの声では、「これ以上勉強させるのか」という不満の声も聞こえてくる。業務自体は良くできていると感じている。

【五十嵐委員長】

業務はできても学習をおろそかにしていると、成長が止まってしまう。ある程度までは良いけれども、その後のステップアップは難しくなる。

【宗方委員】

例えば、小児看護学実習をやるために、保育所とか小学校に学生を行かせるのはいいことだと思う。双方の比較をしながら小児の勉強を進めていくことは大事なと思うし、自ら選択できることも重要である。多職種の実習は意図的に行うことで効果は上がるだろう。

小学校は体験学習が進んでおり、協働的に課題を解決する場面が沢山想定される。協働学習の効果は上がるのではないかと思う。

【高野委員】

資料1の学年目標と到達度評価に戻る。

「どちらかというと思わない」「思わない」はマイノリティな答えと思うが、同一人物が答えているのではないかと思うがいかがか。マイノリティな答えをする学生であったとしても、将来、貴重な看護師の一員を担うことになると思う。

【五十嵐委員長】

回答期限がある。設問には、自由に正直に回答してもらおう前提で作成している。

【高野委員】

後ろ向きの回答をする学生であっても、教員にすくい上げていただくしかない。教員現場には苦労をおかけしている。

【島田委員】

1年生の最初に行う「基礎力リサーチ」において、「モチベーション」とか「看護への興味」などの項目で、気になる回答をする学生は個別に支援している。

【高野委員】

看護師になれたとしても、キャリアを途中で放棄してしまういわゆる「潜在ナース」は、他の職種から比べても多いと思う。苦労をおかけするが、チューターが学習意欲を支援し、すくいあげてほしいと思う。

以 上